千蔭『新撰月百首』の成立

――附・春曙文庫蔵『新撰月百首』翻刻――

山本和明

はじめに

本学図書館春曙文庫に橘千蔭の自筆本『新撰月百首』が所蔵されている。『国書総目録』に「新撰月百首」と立項されるものの、そこには「国学者伝記集成による」と記されるのみ。『国学者伝記集成』を繙けば、「著書」の項に明治二七年刊『慶長以来諸家著述目録（和学者ノ部）』からの引用で、「新撰月百首　一」とある。千蔭研究に資するところの大きい木村寿・渡部輝子両氏による著作目録（「館蔵橘千蔭集『橘しう』（翻刻）―付・調査余録千蔭著作目録―」『早稲田大学図書館紀要』一七　昭五一・三）により、はじめて国会図書館所蔵『千蔭筆叢』（請求番号102-119）の内に収まることを知るのである。今回、その調査過程において、他にも同様の内容を記したものを幾本か確認し得た。それら諸本との比較検討を通じ、春曙文庫蔵『新撰月百首』の成立事情ならびにその位置付けを行ない、さらにそこに窺える千蔭の撰集姿勢を確認することを本稿の目的としたい。また、その内容を検証してもらう意味で、同書の翻刻も併せ、後掲することとした。

撰者である橘千蔭は加藤千蔭とも称する。通称又左衛門、字は徳与麻呂、芳宜園・朮園・耳梨山人とも号す。江戸町奉行与力加藤枝直の息にして享保二十年三月に生まれ、延享元年賀茂真淵に入門する。父の跡を継いで与力となり、天明八年、五四歳のとき致仕する。退隠後に著した『万葉集略解』は有名であり、家集に『うけらが花』がある。村田春海とともに江戸派の双璧として文学史的

に評価を受けている。なお、論者は以前、本研究論集四一号掲載「千蔭関連資料一・二」において、「万葉集略解」関連書簡等を翻刻している。ご参照いただければ幸いである。

春曙文庫『新撰月百首』について

まず、春曙文庫蔵本の概要を掲げておく。『新撰月百首』（請求番号911.15K）は枯色表紙一冊袋綴写本（二二一・七糎×一六・九糎）で全九丁（墨付七丁・表裏に各々遊び紙あり）からなり、後補表紙左には千蔭自筆による原題簽「新撰月百首」が貼付されている。はじめに百首が記され（三丁半）、そのあとに百首撰歌に至った経緯が述べられている（半丁）。残り三丁は四周単辺匡郭の用紙に「林家書牘」と内題し、（享和三年）十一月廿二日付千蔭宛林述斎（大学頭）書簡および別帋・（文化元年）暮春廿六日付同書簡を収めている。後掲の翻刻からも明らかなように、本書は林述斎の需めによって、千蔭が廿一代集の中から、月に関わりのある歌を百首選び出したものである。林述斎は第八代大学頭。名は衡、字は叔紞、蕉軒とも号す。美濃国岩村藩主松平能登守乗蘊の三男で、寛政五年林家第七代大学頭錦峰の後を嗣ぐ。その述斎と千蔭の関わりについて、『泊洒舎年譜』によれば、寛政七年九月六日、書簡を千蔭に送り『時文摘紕』一覧の上、一本を写し礼を陳べたとある（静嘉堂蔵）。その付合いは親密なものであったと思しく、文化五年九月二日に亡くなった千蔭の墓碑銘は林述斎の草するところである（崇文叢書一『蕉窓文草』巻二所収、『事実文編』三六も同じ）。墓碑銘に「翁又称墨妙。其所揮洒。即扇頭紙尾。人争珍之」と記されるように、能筆家である千蔭の揮毫した書は「愛玩」の対象として捉えられていた。今回考察の『新撰月百首』も、述斎書簡によれば「夏月御詠」の揮毫を頼み、授受の後「月に渉り候古歌之秀逸なるは、詩も不及斗覚へ候も多く御座候。然者、可然古歌百首斗選出し、蔵申度候事」と依頼し、その結果、文化元年三月、千蔭七十歳の時に成立したものである。春曙文庫蔵本は虫損がはげしいものの、冒頭の印記に「芳宜園蔵」「春曙文庫」とある。「芳宜園蔵」印は、その流麗な文字とともに千蔭自筆を証するものである。

諸本概要

国会図書館蔵『千蔭筆叢』以下、管見に入った諸本について確認したい。

『千蔭筆叢』は、前掲著作目録では「△新撰月百首　一巻　千蔭編・書　文化元年三月成（写・千蔭筆叢の内）〈国会〉」と記されている。「△」は実見に及んだものの由。しかしながら、実際『千蔭筆叢』を検するとき、そのどこにも「新撰月百首」という題は記入されていないのである。『帝国図書館和漢図書書名目録』第三編では、「千蔭筆叢」の項に「写本〔加藤千蔭、林述斎ノ需メニ応シ月歌百首ヲ撰出シ且林氏ノ依頼状ヲ記シタルモノ末ニ伊庭秀形（ママ）著和文并長歌ヲ付ス〕」とあるばかり。あるいは、木村・渡部両氏による判断であろうか。内容は千蔭自筆本とほぼ同様であるが、途中「本ノ（ママ）」と言った注記もみられ、明らかに後の時代の写本である。『千蔭筆叢』と命名されるものの、先に示されたように、その後半は源秀賢「よつの時の行きかひ」「西城新殿歌」が「新撰月百首」と同筆にて併載され、千蔭関連は「新撰月百首」のみにすぎない。源秀賢は橘千蔭―村上素行の学統に連なる伊庭秀賢のことで、明治五年七三歳にて没している。その繋がりから、恐らく千蔭自筆本『新撰月百首』を書写しえたのではないか。後補表紙題簽に記された『千蔭筆叢』という題も明治三四年一月に収蔵された際に付けられたものであろう。千蔭によって記されたものが、書承のかたちで他にも伝わり得ることを考えるならば、冒頭で触れた『慶長以来諸家著述目録（和学者ノ部）』の著者が実見、あるいは知り得た「新撰月百首　一」が、千蔭自筆本であると即断はできないものの、少なくとも春曙文庫蔵本がその原本であることに間違いはない。

『新撰月百首』はその内容からみて、千蔭のもとに残された手控えといった性格が強い。実際、林述斎のために揮毫したそのものではない。ここで、述斎からの礼状である暮春廿六日付千蔭宛書簡に「月下此帖を展閲」とあることに注目したい。依頼の際に、述斎は「別書之趣ニ出来候得は法帖之如く仕立申付」（十一月廿二日付千蔭宛書簡）と述べ、事実「帖」に仕立てているのである。それも「撰集作者をもかゝず、四行あるは五行にならべ書」かれているという。さらに、「先達而は月百詠之草御頼申候」という言葉にみるように、『新撰月百首』という題ではなさそうである。『国書総目録』を検すれば、書簡に見出だされた千蔭著『月百詠』という題を確認しうる。しかし前と同様、その所蔵は確認されず、「大日本歌書総覧による」とある。

福井久蔵編『大日本歌書綜覧』（大正十五年八月初版発行、昭和四九年五月国書刊行会再版）定数歌集の部（中巻四四五頁）に次の如く述べられている。

月百詠　寫一帳　加藤千蔭

『春霞たなびきにけり久方の月の桂も花や咲くらむ』以下月の百首を自書せるを帖とせるもの。子爵水野忠欽氏所蔵。

（傍線引用者）

「春霞…」以下、月に関わる歌百首とあり、体裁も「帖」である。『大日本歌書綜覧』記載の『月百詠』は、林述斎に渡された原物であったと考えてよさそうである。残念ながら、水野忠欽子爵所蔵であった『月百詠』を稿者は確認できていない。しかし、その内容を別に確認することができた。

松浦静山『甲子夜話』続編巻七四―一（原本未見。平凡社東洋文庫『甲子夜話続編6』二一七頁）に、千蔭の撰による「月百詠」が収められている。巻七四―一の冒頭には「檉宇が書、并に冊子、下に編述す」とある。檉宇とは林檉宇のことで、林述斎三男、第九代大学頭。名は銑、字は用韜、摘斎とも号す。弘化三年、五四歳にて没している。その檉宇による静山宛年次未詳廿三日付書牘（写）と千蔭撰の「月百詠」、成島和鼎撰の「月百首」が『甲子夜話』に収載されているのである。今、試みにその書牘を掲げる。

静山老侯侍史　銑

口述

此二種は、外題跋文に御座候通り之訳にて、拙家に御坐候。いかにも両人銘々見所かはり候も面白く御坐候。もしや例の御冊子中に入可申」哉と先先呈覧。御序之節に御返擲奉」希候。以上。

廿三日

ここに明らかなのは、林檉宇は、家に伝わる千蔭『月百詠』を静山に呈覧にいれ、静山はその書牘ともども採録したということである。「例の御冊子中に入可申」というのだから、はじめから『甲子夜話』への収録を願ってのものであった。『甲子夜話』が檉宇の父、静山の幼馴染である林述斎の勧めによって、文政四年十一月十七日、即ち甲子の日に筆を起こしたことは夙に有名なエピソードであ

るが（氏家幹人『殿様と鼠小僧』一三〇頁）、その情報収集に息子の樫宇も一役かっていたようである。内容であるが、先述の年次未詳廿三日付静山宛樫宇書牘に引き続き、「月百詠　橘千蔭撰」とあり、以下、百首ではなく九九首のみが収められている。そこには『新撰月百首』所収書簡にあるように、撰集名・作者名は書かれていないし、もちろん「林家書牘」もない。

林述斎監修のもと、昌平坂学問所で作成された「朝野旧聞裒藁」の編者の一人である宮崎成身が、天保元年から書き留めた見聞雑録集『視聴草』八集之七に、『甲子夜話』所収の「月百詠」と同じものをみることができる（汲古書院・昭和六十年七月発行、第七巻一一五頁）。その歌配列など、『甲子夜話』に一致。『視聴草』の中には、他にも松浦静山が書き留めたものと全く同じものが見出だされる例が存在するというが（氏家幹人前掲書四〇頁）、幕臣である成身は林家に出入りすることが多く（前掲書四〇頁）、その出入りのなかで実見に入ったのやも知れぬ。

以上、諸書に伝わる「月百詠」・「新撰月百首」の関係を示すならば次のようになろう。

- 新撰月百首（春曙文庫蔵・千蔭自筆）……千蔭筆叢（国会図書館蔵）
- 月百詠（旧水野忠欵子爵蔵・千蔭自筆・未見）
  - 月百詠（甲子夜話所収・原本未見）
  - 月百詠（視聴草所収）

『月百詠』と『新撰月百首』

それでは『月百詠』と『新撰月百首』との互いの関係はどうなのであろうか。『新撰月百首』が千蔭の側の手控え、『月百詠』が林述斎の側に渡ったもの、とはいえ、『新撰月百首』（春曙文庫蔵本）と『月百詠』（『甲子夜話』所収）とを比較するならば、その歌の配列、所収歌に違いが存在するなど、全く同一のものではない。

二つの可能性が想定できるように思われる。一つは、『新撰月百首』が千蔭にとっての草稿のようなものであり、『月百詠』への浄書過程で幾つかの歌を変更したのだ、と考えること。もう一つは、『新撰月百首』に（文化元年）暮春廿六日付の述斎からの礼状を収めていることからみて、『新撰月百首』は『月百詠』以後に編まれたとも考えられるのである。

このことを確認するために、煩雑ではあるが『新撰月百首』と『月百詠』の相違点を挙げ、検討しようと思う。『新撰月百首』の翻刻を後掲するため、ここではその『新撰月百首』を基礎として、『月百詠』との相違点を主に掲げることにする。なお、歌番号は後掲『新撰月百首』翻刻に際し、新たに付したものであり、論の煩多を避けるために、この歌番号で以下、論じていくこととする。

『月百詠』との相違点　（但し漢字仮名の別、「ん」と「む」などは考慮しない。）

〈校異〉

※09末尾「きゆるなりけれ」が「きゆるなりけり」。
※13「みる空もなき」が「見るほどもなき」。
※21「月の光し」が「月の光の」。
※23「あかすなかるゝ」が「あかずかたぶく」。
※24「なりける」が「なりけり」。
※42「木のまもりつる」が「木間もりくる」。
※63「こひしきは」は「恋しさは」。
※81「なには江の」は「難波がた」
※91「宿かる」は「やどもる」。

〈配列・歌の異動〉　（　）内の歌集名、(a)～(h)の符号は新たに付した。

※02と03の順が逆。
※06と07の間に次の歌有り。
(a)あかず見る花の深きよの雲井にかすむ春の月かげ（新拾遺巻二春歌下一二八　前大納言為家）
※11「よもすからやとる清水の涼しさに月も夏をやよそにみるらん」ナシ。
※18「夕立のまた晴やらぬ雲間より同し空ともみえぬ月かな」ナシ。
※26「こぬ人をしたにまちつゝ久かたの月をあはれといはぬよそなき」ナシ。
27「よくともにくもらぬ雲の上なれはおもふ事なく月をみるかな」ナシ。
※30と31の間に次の四歌有り。
・95の歌
(b)難波がた入江のあしのよとゝもに月こそやどれあきのうらなみ（続後拾遺第五秋歌下二三六　入道親王尊円）
(c)さやけさは思ひなしかと月かげをこよひとしらぬ人にとはゞや（金葉二度本第三秋一八五　源親房）
(d)霧はるゝふしみのくれの秋かぜに月すみのぼるをはつせのやま（新後撰第四秋三四四　前中納言有房）
※38の前に43の歌有り。
※44の前に次の歌有り。
・96の歌
(e)百敷の大宮ながら八十しまを見るこゝちする秋のよのつき（拾遺第十六雑春一一〇六　読み人しらず）

※45「雲消ゆるちさとのほかの空さえて月よりうつむ秋のしら雲」ナシ。
※46と47の順が逆。
※53の歌、79の前に有り。
※62の前に次の歌有り。
(f)山のはゝそれとも見えずうづもれて雪にかたぶくありあけの月（続拾遺巻六冬歌四六二　従三位通氏）
※69の前に次の歌有り。
(g)わするなよほどは雲井に成ぬとも空行月のめぐりあふまで（拾遺巻八雑上四七〇）
※82「よの中のうきをもしらすすむ月の影はわか身の心ちこそすれ」ナシ。
※84「世にふるに物おもふとしもなけれとも月にいくたひなかめしつらん」ナシ。
85「おもふ事有とはなしに久かたの月よとなれはねられさりけり」ナシ。
86「あり明の月の光を待ほとにわかよのいたく更にけるかな」ナシ。
※92の歌は98の前に有り。
※93の前に次の歌有り。
(h)ながむるにものおもふことのなぐさむは月もうきよもほかよりやゆく（拾遺巻八雑上四三四　大江為基）
※94と97が順序逆。（95・96は既に前に配置）
※99と100が順序逆。

歌配列や所収歌にかなり異同が存在することが明らかであろう。配列に関してみるに、後掲の『新撰月百首』各歌に付されている撰集名を、同様に『月百詠』において確認しても、ともに廿一代集の成立順には並んでいないことが確認できる。しかし、『新撰月百首』『月百詠』双方に共通して、ある種の「部立」意識が存在していることは云えるのではないか。歌ことばの中に、例えば季節を表す明確な言葉が詠み込まれ（例えば「春のよの月」「夕立」「山風」など）、グループを形成している場合が最も数多い。06や62などのように歌に季節を示す言葉を明確には見出だしにくくても、あるいは季節を示す言葉があったとしても、撰歌にあたって、元々の撰集の部立に準じている場合もある。

仮に、その区分（部立）を想定し述べるならば、次のようになろう（『新撰月百首』の場合で示す）。

春―01～06　夏―07～18　秋―19～52　冬―54～61　恋―62～72　雑―73～100　※53を仮に除く

こうした部立を想定してみたとき、勿論、多少の「矛盾」は存在する。しかし、その中でも、例えば歌番号48・94に注目したい。

48は千載集巻十九釈教歌一二七四番の俊成の歌である。『新撰月百首』では「秋」歌と想定されるのだが、この変更は歌中「秋のよの月」という言葉が存在する故のものである。94は玉葉集巻五秋歌下六六八の歌であるが、これも元々の歌集の部立ではなく、仮に云う「雑」部へと変更されている。この変更も、ひとえに歌ことば「石上ふる」に着目してのことと考えられる。「石上」は「ふる」を導く枕詞であるが、どうやら千蔭はこの歌を、歌枕である石上寺との連想からか、部立でいう「神祇」歌と捉えていたように思えるのである。他にも47・50・52・56・57などの歌が、歌中の言葉から元々の部立とは異なるところに配置されている。そのことから、元々の廿一代集の部立を尊重しつつも、千蔭なりに変更を加えて「部立」を果たしていることが確認される。

想定した部立は、『新撰月百首』と『月百詠』での歌配列の異同、所収歌の相違においても、変更が加わるものではない。むしろ、より『月百詠』の方が「部立」の明確化がなされているようである。一概には言い切れないが、例えば、先の区分に入れていない53の場合、新古今和歌集巻十羇旅歌に属するものが、『新撰月百首』では「秋・冬」の部立の境界に存在していた。それが『月百詠』では79の前、先に云う「雑」部へと変更されているのである。また95、『新撰月百首』では「雑」部に属していた歌は、『月百詠』では30と31の間に位置することになる。「秋歌下」という、本来の部立に見合った位置への移動とみてよかろう。他にも11・26の歌がカットされているのだが、これも『新撰月百首』にて元々の撰集の部立と、違った位置に配されていた歌である。

逆に『月百詠』で新たに加わった歌の場合はどうか。全部で八首が加わっているが、そのうち六首が適切な位置へと配されている。元々の部立と違う位置に配されたのは二首、先の一覧の(e)(g)である。(e)は元々「雑春」という部立であったが、歌中の「秋のよのつき」ということばからか、「秋」に配されている。(g)も「雑上」から「恋」へという配置替えであったが、この歌の中の「めぐりあふまで」という詞にひかれてのことであろう。このように理由づけの可能な変更が多く存在することを思う時、『月百詠』では、『新撰月百首』に比して、ある意味でより正しい「部立」を示そう、内容に見合った「部立」にしようという意識が働いているように考えられる。勿論、14・49などのように、元々なぜその位置に置かれているのか、理由付けしにくい場合もあるし、02と03・94と97などの位置変更のように、書写段階における目移りとしか考えられない異同もある。

このように考えてみるとき、『新撰月百首』と『月百詠』の先後関係は、『新撰月百首』から『月百詠』へという方向性（ベクトル）しか有り得

ず、逆は想定できないであろう。つまり『新撰月百首』は、『月百詠』作成段階の資料と、述斎とのやりとりのなかで送られてきた書簡とを併せ持った備忘録、手控えという位置付けができるのである。その改編・整備過程の中で、『月百詠』では97・94・92・98・100・99という一群を、一纏として「神祇・賀」関連の小グループに形成していることが明確になってきたようにも思われる。

こうした編集過程における改編、とりわけ収録歌の大幅な変更は有り得ることと云わねばならない。たとえば田中康二氏は、村田春海の『琴後集』と寛政十二年成立春海自撰『百首和歌』とをとりあげ、『百首和歌』所収歌中、九首もの自撰歌が『琴後集』に採録されていないということを根拠とし、『百首和歌』は『琴後集』の撰集資料としては使われておらず、春海自撰歌群すら撰集資料とならなかった『琴後集』を非常に不備な歌集と位置付けておられる（「『琴後集』撰集攷」『近世文芸』五九）。『琴後集』成立期と寛政十二年という時間差の問題だけでなく、今回の考察例にみるように、撰者の、編集過程における意識の変化も存在するはずである。こうした撰集にあたっての資料などは、形成された途端、「固定」化される存在なのではない。『新撰月百首』でも、実際に林大学頭に贈ったものと違っていることを考えるならば、こうした「変化」は、何も自分の歌、他者の歌に限らず、常に想定され得る状況ではないだろうか。

おわりに

『甲子夜話』所収、静山宛年次未詳廿三日付書牘の中でいみじくも眺は述べている、「いかにも両人銘々見所かはり候も面白く御坐候」と。ここには確かに千蔭の「見所」への興味が、ある。加えて、写本という形で書承されていったことは、一概に千蔭の、「風早家之好之由ゆゑ模造いたさせ」るほどの「書」としての著名さゆえの享受だけではなかったことも意味しよう。歌人としての千蔭がいかなる歌を選択するか――まさにこれは千蔭の撰歌意識への興味、つまり如何なる歌を千蔭は良しとするかへの興味、に他ならないのである。『新撰月百首』の撰歌傾向については古今集と新古今集が抜きんでて多い。従来の研究成果は、兎角その自詠歌からその特徴を探る傾向があったが（例　辻森秀英「江戸派歌風の系譜」『和歌文学研究三六』昭和五一・三）、撰集においても、その選歌傾向から特徴をみることも可能なのかも知れない。

【附・資料翻刻】

・虫損により判読不能の場合、国会図書館蔵『千蔭筆叢』により校合し、〔　〕で括り記した。
・ゴチック体で示した歌番号、および（　）内に示した巻・部立・新編国歌大観番号・作者名は山本が付した。また撰集名が付されていない場合、誤りのある場合にはそれも付記した。
・原本では、撰集名が歌句冒頭右傍に付されているが、翻刻にあたって頭に配置した。
・本文中、見セ消チなどにより訂正が加えられた場合、訂正後の本文を記し、後注で確認を加えた。
・朱で記された箇所は、後注で指示した。
・百首歌の翻刻ならびにその調査に際し、本学助手川崎協子氏の協力を得た。記して感謝申し上げる。
・『新撰月百首』の調査・翻刻の許可をいただいた相愛大学・相愛女子短期大学附属図書館に深謝申し上げる。

新撰月百首

01 後撰　春霞たな引にけり久かたの月の桂も花やさくらん　（巻一春上一八　紀貫之）
02 同　あたらよの月と花とをおなしくは心しれらんひ〔と〕にみせはや　（巻三春下一〇三　源信明）
03 新古　照もせすくもりもはてぬ春のよの朧月よに〔し〕く物そなき　（巻一春歌上五五　大江千里）
04 続古　春のよの霞の間より山のはをほのかにみせて出る月かけ　（続拾遺巻二春歌下一二九　前大納言為氏）
05 玉葉　山のはゝそこともわかぬ夕くれに霞を出る春のよのつき　（巻一春歌上一二一　中務卿宗尊親王）
06 風　うちわたすうちの渡りのよふかきに河音すみて月そかすめる　（巻二春歌中一二二　前大納言為兼）
07 後撰　天河水まさるらし夏のよはなかるゝ月のよとむ〔ま〕もなし　（巻四夏二一〇　よみ人しらず）
08 古今　夏のよはまた宵なからあけぬるを雲のいつこに月やとるらん　（巻三夏歌一六六　清原深養父）
09 金葉　夏のよの庭にふりしく白雪は月の入こそきゆるなりけれ　（巻二夏部一四一　神祇伯顕仲）
10 新古　庭のおもはまたかわかぬに夕立の空さりけなく澄る月かな　（巻三夏歌二六七　従三位頼政）

11 新勅　よもすからやとる清水の涼しさに月も夏をやよそにみるらん　（巻四秋歌上一八五　正三位顕家）

12 続古　手にむすふ板井の清水そこみえて影もにごらぬ夏のよの月　（巻三夏歌二六二　入道前太政大臣）

13 続後撰　夏刈の玉江のあし〔の〕みしかよに〔み〕る空もなき月のかけかな　（巻三夏歌二二四　忠房親王）

14 新勅　わすれては秋とかおも〔ふ〕かた〔をか〕の〔なら〕のは〔分て〕いつる月かけ　（巻十六雑一〇六五　藤原親康）

15 後拾遺　夏のよの月はほと〔な〕く〔入〕ぬともやとれる水〔に〕影をとめなん　（巻三夏二二二　土御門右大臣）

16 続古　いつるよりくもらぬ影をみかは水うつ〔す〕も清き夏のよの月　（巻三夏三〇九　後山階前内大臣）

17 続後撰　夏衣すそのゝ原の草枕むすふほとなく月そかたふく　（巻十九羇旅歌一三〇四　権中納言顕朝）

18 千載　夕立のまた晴やらぬ雲間より同し空ともみえぬ月かな　（巻三夏二一七　俊恵法師）

19 古今　久かたの月のかつらも秋くれはもみちすれはやてりまさるらん　（巻四秋歌上一九四　壬生忠岑）

20 同　白雲に羽打かはしとふ雁のかすさへみゆる秋のよのつき　（巻四秋歌上一九一　よみ人しらず）

21 同　秋のよの月の光しあかけれはくらふの山もこ〔え〕ぬへらなり　（巻四秋歌上一九五　在原元方）

22 後撰　秋の海にうつれる月を立かへり波はあらへといろ〔も〕かはらす　（巻六秋中三二二　清原深養父）

23　天川しからみかけてとゝめなんあかすなかるゝ月やよとむと　（後撰巻六秋中三二九　よみ人しらず）

24 拾遺　水のおもにてる月なみをかそふれはこよひそ秋の〔も〕中也ける　（巻三秋一一五　源順）

25　いつこにかこよひの月のみえさらんあかぬは人の心也けり　（拾遺巻三秋一七六　凡河内躬恒）

26　こぬ人をしたにまちつゝ久かたの月をあはれといはぬよそなき　（拾遺巻十八雑歌一一九五　紀貫之）

27　よ〔くと〕もにくもらぬ雲の上なれはおもふ事なく月を〔みる〕かな　（金葉巻三秋部二一〇　藤原定家）

28 千載　玉よする浦わの風に空はれて光をかはす秋のよの月　（巻四秋歌上二八二　崇徳院御製）

29　石はしる水の白玉数みえて清瀧河にすめる月かけ　（千載巻四秋歌上二八四　皇太后宮大夫俊成）

30　詠わひぬ秋よ〔り〕外の宿もかな野にも山にも月やすむらん　（新古巻四秋歌上三八〇　式子内親王）

31　さむしろやまつよの秋の風ふけて月をかたしくう〔ぢ〕の橋姫　（千載巻四秋歌上四二〇　藤原定家）
32　新勅　天つ空うき雲はらふ秋風にくまなくすめるよはの月かな　（巻四秋歌上二五三　大炊御門右大臣）
33　袖のうへに露おきそめし夕へよりなれていくよの秋のよの月　（新勅巻四秋歌上二六五　藤原頼氏）
34　続後撰　月清み都の秋をみわたせは千里にしける氷なりけり　（巻六秋歌中三三一　皇太后大夫俊成）
35　続古今　さしのほるゐなの湊のゆふしほに光みちた〔る〕秋のよの月　（巻四秋歌上四〇五　入道前太政大臣）
36　続拾遺　清みかた月すむよはの村雲はふしの高ねのけふり也けり　（巻五秋歌下三一一　登蓮法師）
37　玉葉　月さゆるあかしのせとに風ふけは氷のうへにたゝむしらなみ　（巻五秋歌下六五七　西行法師）
38　同　秋のよもわかよもいたく更ぬれはかたふく月をよそにやはみる　（巻五秋歌下七〇三　従三位頼政）
39　続千　更ゆけは松風さむし大とものみつのとまりの秋のよの月　（巻五秋歌下四九三　中務卿宗尊親王）
40　同　さゝなみやひらの山風さよふけて月かけさむししかのから崎　（巻五秋歌下五一〇　鎌倉右大臣）
41　続後撰　更行はまきのを山に霧はれて月かけきよしうちの川浪　（巻五秋歌下三三八　永福門院）
42　風雅　ほともなく松より上に成にけり木のまも〔り〕つる夕くれの月　（巻六秋歌中　前大納言尊氏）
43　新千　いくとせか千々に物思ふ秋をへて月に涙の〔数〕つもるらむ　（巻四秋歌上四二二　源兼氏）
44　新拾　みぬ〔よ〕まて心にうかふ秋のよの月やむかしの鏡なるらん　（巻四秋歌上四〇八　大納言顕実母）
45　新後拾　雲消〔ゆる〕ちさとのほかの空さえて月より〔う〕つむ秋のしら雲　（巻四秋歌上三五六　後京極摂政前太政大臣）
46　新続古　くもりなき月もま〔す〕みの鏡山名〔に〕あら〔は〕れてみゆるよは哉　（巻四秋歌上四六〇　山階入道前左大臣）
47　千載　何となくなかむる袖のかわかぬは月のかつらの霧やおくらん　（巻十六雑歌上一〇一三　藤原親盛）
48　同　きふね川玉ちるせゝの岩波に氷をくたく秋のよの月　（巻十九釈教歌一二七四　皇太后宮大夫俊成）
49　新古　石川やせみのを川のきよけれは月もなかれを尋〔て〕そすむ　（巻十九神祇歌　鴨長明）
50　風雅　なけくとて袖の露をはたれかとふおもへはうれし秋のよの月　（巻十五雑歌上一五七七　土御門院御製）

51 後撰　いつとても月みぬ秋はなきものをわきてこよひ〔の〕めつらしき哉　（巻六秋中三二五　藤原雅正）
52 新拾　いせしまや月に折敷濱荻のかりねもさむし秋の汐風　（巻九羇旅歌八四二　法眼源承）
53 新古　わすれしと契て出し面かけはみゆらん物をふるさとの月　（巻十羇旅歌九四一　摂政太政大臣）
54 続拾　さゆるよもよとまぬ水の早せ河こほるは月の光なりけり　（巻六冬歌四一三　権大納言長雅）
55 新古　なかめつゝいくたひ袖にくもるらん時雨にふくる有明の月　（巻六冬歌五九五　藤原家隆）
56 千載　霜冴る庭の木のはをふみ分て月はみるやと〔と〕ふ人もかな　（巻十六雑歌上一〇〇九　円位法師）
57 続拾　いたつらにことしもくれぬとのへもる袖の氷に月〔をかさね〕て　（巻七雑春歌四六三　如願法師）
58 同　まのゝうらや入海寒き冬かれのを花の浪に氷る月かけ　（巻六冬歌六二八　前大僧正実超）
59 新古　吹はらふ嵐の後の高ねより木のはくもらぬ月やいつらん　（巻六冬歌五九三　宜秋門院丹後）
60 同　冬枯の森のくちはの霜の上に落たる月のかけの寒けさ　（巻六冬歌六〇七　藤原清輔）
61 同　霜こほる袖にも影は残りけり露よりなれし有明の月　（巻六冬歌五九四　右衛門督通具）
62 古今　月やあらぬ春やむ〔か〕しの春ならぬわか身ひとつはもとの身にして　（巻十四恋歌四・七四七　在原業平）
63 拾遺　こひしきはおなし心にあらすともこよひの月を〔君み〕さらめや　（巻十三恋三・七八七　源信明）
64　こよひ君いかなる里の月をみてみやこにたれをおもひいつらん　（拾遺巻十三恋三・七九二　中宮内侍）
65　月かけにわか身をかふる物ならはつれなき人〔も〕あはれとやみん　（古今巻十二恋二・六〇二　壬生忠岑）
66 新千　せきわふる泪をたにももらさすはいくよもやとれ袖の月かけ　（巻十一恋歌一・一一四一　従三位経有）
67 新古　わくらはに待つるよひも更にけりさやはちきりし山のはの月　（巻十四恋歌四・一二八二　摂政太政大臣）
68　松山とちきりし人はつれなくて袖こす浪にのこる月かけ　（新古巻十四恋歌四・一二八四　藤原定家）
69 新千　もらすなよ霧のよすかの袖の月草はの外にやとりありとは　（巻十一恋歌三・一一三九　法印浄弁）
70 新拾　今よひ又空しき袖に更ぬとはなみたにやとる月そしるらん　（巻十三恋歌三・一一五〇　前中納言冬定）

71 新後撰　独寝の床になれにし月かけを諸ともにみるよはも有けり　（巻十三恋歌三・一〇〇七　前大納言経任）

72 金葉　い〔と〕ゝしく俤にたつこよひ哉月をみよとも契さりしに　（巻八恋部下四二四　内大臣）

73 古今　我心なくさめかね〔つ〕さらしなやおは捨山にてる月をみて　（巻十七雑歌上八七八　よみ人しらず）

74 同　大かたは月をもめてし是そ此つもれは人の〔おい〕とな〔る〕もの　（巻十七雑歌上八七九　在原業平）

75 〃　ふたつなき物とおもひしを水底に山のはならて出る月かけ　（巻十七雑歌上八八一　紀貫之）

76 〃　天川雲のみをに〔て〕早けれは光とゝめす月そ〔なか〕るゝ　（巻十七雑歌上八八二　よみ人しらず）

77 〃　月よゝしよゝしと人につけやらはこてふにゝたりまたすしもあらす　（巻十四恋歌四・六九二　よみ人しらず）

78 〃　天の原ふりさけみれはかすかなるみかさの山に出し月かも　（巻八羇旅歌四〇六　安倍仲麿）

79 新古　月ことになかるとおもひします鏡西の空にもとまらさりけり　（巻十八雑歌下　菅贈太政大臣）

80 後撰　いつとてもかはらぬ秋の月みれはたゝいにしへの空そこひしき　（巻十五雑一・八五三　藤原実綱）

81 詞花　なには江のあし間にやとる月みれはわか身ひとつもしつまさりけり　（巻九雑上三四七　左京大夫顕輔）

82 玉葉　よの中のうきをもしらすすむ月の影はわか身の心ちこそすれ　（巻十八雑歌五・二四九四　西行法師）

83 風雅　すむとてもたのみなきよをおもへとや雲かくれぬる有明の月　（巻十七雑歌下一九九一　正三位季経）

84　世にふるに物おもふとしもなけれとも月にいくたひなかめしつらん　（拾遺抄巻十雑下四九七　中務卿具平親王）

85　おもふ事有とはなしに久かたの月よとなれはねられさりけり　（拾遺抄巻十雑下四九八　紀貫之）

86　あり明の月の光を待ほとにわかよのいたく更にけるかな　（巻十雑下五〇一　蔵人藤原仲父）

87 新勅　おもひ出て昔をしのふ袖の上にありしにあらぬ〔月そ〕やとれる　（巻十六雑歌一・一〇七七　鎌倉右大臣）

88 千載　もろともに見し人いかに成にけん月は昔にかはらさりけり　（巻十六雑歌上九九五　登蓮法師）

89 新勅　松の戸をおし明かたの山風に雲もかゝらぬ月〔を〕みるかな　（巻四秋歌上二六七　正三位家隆）

90 千　住わひて身を隠すへき山さとにあまりくまなきよはの月哉　（巻十六雑歌上九八八　皇太后宮大夫俊成）

91 新古　ふるさとの宿かる月にことゝはんわれをはしるや昔住きと　（巻十六雑歌上一五五一　寂超法師）

92　久かたの月のかつらの男山さやけき影は所からかも　（続古巻七神祇歌七〇〇　卜部兼直）

93 拾遺　水底にやとる月たにうかへるをしつむや何の〔みく〕つなるらん　（巻八雑上四四一　左大将済時）

94 玉葉　石上ふるの高橋よゝかけて月もいくよか澄わたるらん　（巻五秋歌下六六八　右兵衛督雅孝）

95 続後拾　水や空そらや水ともみえわかすかよひてすめる秋のよの月　（新後拾巻五秋歌下三七二　よみ人しらず）

96 新古　住人も有か無かの宿ならし芦間の月のもるにまかせて　（巻十六雑歌上一五三〇　大納言経信）

97 続古　池水にいはほとならんさゝれ石の数もあらはにすめる〔月〕かけ　（巻二十賀歌一八七七　参議雅経）

98 新拾　くもりなき君かやちよをてらすらし神路の山に出る月影　（巻十六神祇歌一三八九　達智門院）

99 新勅　よもの海風しつかなる波の上にくもりなきよの月をみる哉　（続後撰巻二十賀歌一三六一　後京極摂政前太政大臣）

100 続拾　君か住同し雲ゐの月なれは空にかはらぬ万よのかけ　（巻十賀歌七三八　前大納言為氏）

こ〔は〕林の君常に月をめて給ふ事世の人にこ〔え〕給ひて月にむかひてからやまとの歌をすし給ふを御心すさひとなしたまへりすへて月によれるよき歌はからうた〔の〕およはさるもあまたあなれハ古今集よりこなた廿一代の集の中にて百首ことさらにえり出てみつから書てよとのたまふまゝに隅田河のほとりにしはしうつろひ〔す〕みける比かくはえらひ出て書てまゐらするなり時は文化のはしめのとしやよひのすゑつかたになん有ける

七十の翁橘千蔭

歌は白ききぬをしきしの形にして撰集作者をもかゝす四行あるは五行にならへ書りちらしかくハいと後世の〔ことと〕みゆれは也

林家書牘

向寒之節御坐候所愈御安寧珍重之御事ニ〔御〕坐候然者先達而ハ夏月御詠早速御一揮被下千万忝永く秘玩之一幅ニ備蔵申候扨又数々御面倒なから御頼申度儀有之委細別帋を以申遣候急キ候事ニハ〔無〕之候間来春へ掛ヶてゆるりと被成下候様存候是迄御揮灑之品にて愛玩いたし可申ほと具シ候ものも無之候旁希候事ニ御座候何分御許下被下度存候草々以上

十一月廿二日　大学頭

千蔭様

別帋

月ハ古今騒人墨客之通賞〔勿〕論ニ候處野子儀別して相好ミ月に対候時ハ臆記之詩歌吟誦を娯楽之一とい〔たし〕候都而月に渉り候古歌之秀逸なるハ詩も不及斗〔に〕覚へ候も多く御座候然者可然古歌百首斗選出し置申度候事

一古今之秀逸と申候而も陰(マヽ)然たる事ニ〔候間〕廿一〔代〕集之内より選択候方可然哉万葉之短歌挽入候得はいかにも彼詩ニ古詩之交り候様ニ候間除き候方哉と被存〔候〕末々の撰集ハ高見ニハ叶ひ申間敷哉ニハ候得は繊巧艶麗之躰も難弁様ニ御座候一躰月夜之光景目前のまゝ申叶へ候は申迄も無之月に〔より〕情懐を抒へ感慨を発候歌四季無襍ニかゝはらす選申度右〔御〕採択も可然御頼申候事

一絖を色帋形に裁断して相添候間右へ御〔認〕可被下候旦終り二枚斗にて右御頼之主意さつと竣尾〔之〕御一首も希度候事

一別書之趣ニ出来候得は法帖之如く仕立申付永く秘蔵いたし候存念ニ御座候数多キ事に候間呉々も御急キ無之御気向宜しき折々少々つゝも御染毫被下度候閑散之御身分にも候得者却而歳柳春初抔は御閑隙にも可有之哉いつにて〔も御〕勝手よき節被成下候様御頼申候事

色帋形御認被下候はゝ裏へ一二ノ小札張付給り候様希存候歌斗にて題并ニ作者姓名等ニハ及申間敷や夫等之所ハ書式なとも可有之事故いつれにても御了簡次第被成被下度候事

小簡致啓達候兎角不同之時気ニ御座候所愈御安寧珍重之御事ニ御座候然は先達而は月百詠之草御頼申候趣も有之候所此度御采撥之上御揮染被下殊更墨水荘御逗留中〔被成候〕由いかにも江山之助も有之候哉御筆意別して趣妙を覚え永く秘玩可致と厚く忝存候数多之所大に御面倒を拭候儀と存候御竣尾も風流瀟洒處以菴外之想有之月下此帖を展閲古風吟哦之興不堪抑躍事ともに御座候呉々も鳴謝難巻御座候誤而此品粗末之至ニ候得とも風早家之好之由ゆゑ模造いたさせ懸御目申〔は〕御座右之御清玩にも被成下候はゝ本懐之至と御坐候旦手製之蛋糕等相添申候聊奉謝之御悦を表し候御笑留可被下候尚他日拝顔も有多御礼可申述候草々以上

暮春廿六

尚々折角時気〔御〕いとひ可被成候久〔々不得書〕面いつそは御出をも乞可申と存候今春東鄰之地を囲込少々団廬之趣を設る積りゆゑ木石之経営にても出来候はゝ一日御咄しに御出被下度御座候歳月荏苒甚御疎闊想像之至ニ御座候以上

千蔭様　　大学頭

〈後注〉

・29 「清瀧」の「瀧」に訂正の跡あり。
・31 「ふけは」朱の見セ消チで「ふけて」。
・35 「きしのほる」朱の見セ消チで「さしのほる」。
・72 「契さりしに」の「さり」に訂正の跡あり。
・75 「なくて」朱の見セ消チで「ならて」。
・76 「雲のみをこ〔て〕」朱の見セ消チで「雲のみをに〔て〕」。
・97 「いはほに」墨の見セ消チで「いはほと」。
・「月をめて給ふ事世の人をこ〔え〕給ひて」朱の見セ消チで「月をめて給ふ事世の人にこ〔え〕給ひて」
・「歌は白ききぬ～みゆれは也」朱筆。
・「林家書牘」の「家」に訂正の跡あり。「祭酒」とある。

追記　本稿校正段階で、所蔵者であった田中重太郎博士の随想「昭和三十八年正月二日」（『緑壺』第五号　相愛女子短期大学文芸部）で、『新撰月百首』に触れておられることが確認できた（柿谷雄三先生御教示）。『新撰月百首』購入時に、どのような状態であったかなどが伺われる。興味深く思われるため、以下、関連部分を引用しておく。

きょうは、二日。三年前から頼まれ、近刊予告の広告があちらこちらの雑誌に出ている「枕冊子全注釈」の原稿執筆をぜひ進めようとして、午前九時半、机に向かったのはいいが数行も書かないうちに、書籍小包の到来である。年末にとどいた某書店の分と二つの包みを解いて、一冊一冊調べているうちに午後二時になった。　（略）　午後四時から、また、本の整理。「新撰月百首」という六枚の小冊子が加藤千蔭の自筆らしく、うれしさに赤ん坊の泣き声も耳に入らない。「芳宜園蔵」の朱印がとてもきれいだが、本は、どのページもかわいそうに虫食い虫食い虫食いで、ほとんど読めないところが多い。のみならず、虫が食っているため、紙がなかなか離れない。はがそうとすると、ちぎれてしまいそうだ。十分間以上もかかって、やっと一枚を二枚にした。タンキ大学教授のくせにこういうことになると息をこらして、ゆっくりとはなす。本がかわいそうだといとおしむ。これもさっそく経師屋へ出して、たいせつに保存しておこう。裏打ちをすると、本の趣きがなくなって、いやだが、本を長生きさせるためにはしかたがない。人間でも生きるためには外科手術をするのだ。

この「月百首」の後半に、「大学頭」から「千蔭」あての「林家書牘」の写しが二通（三丁）千蔭の筆で付いているのもありがたい。早くなおしに出して、調査報告をしたいものだ。